

第2編 町並・街角の古写真

第1章 町並遠望

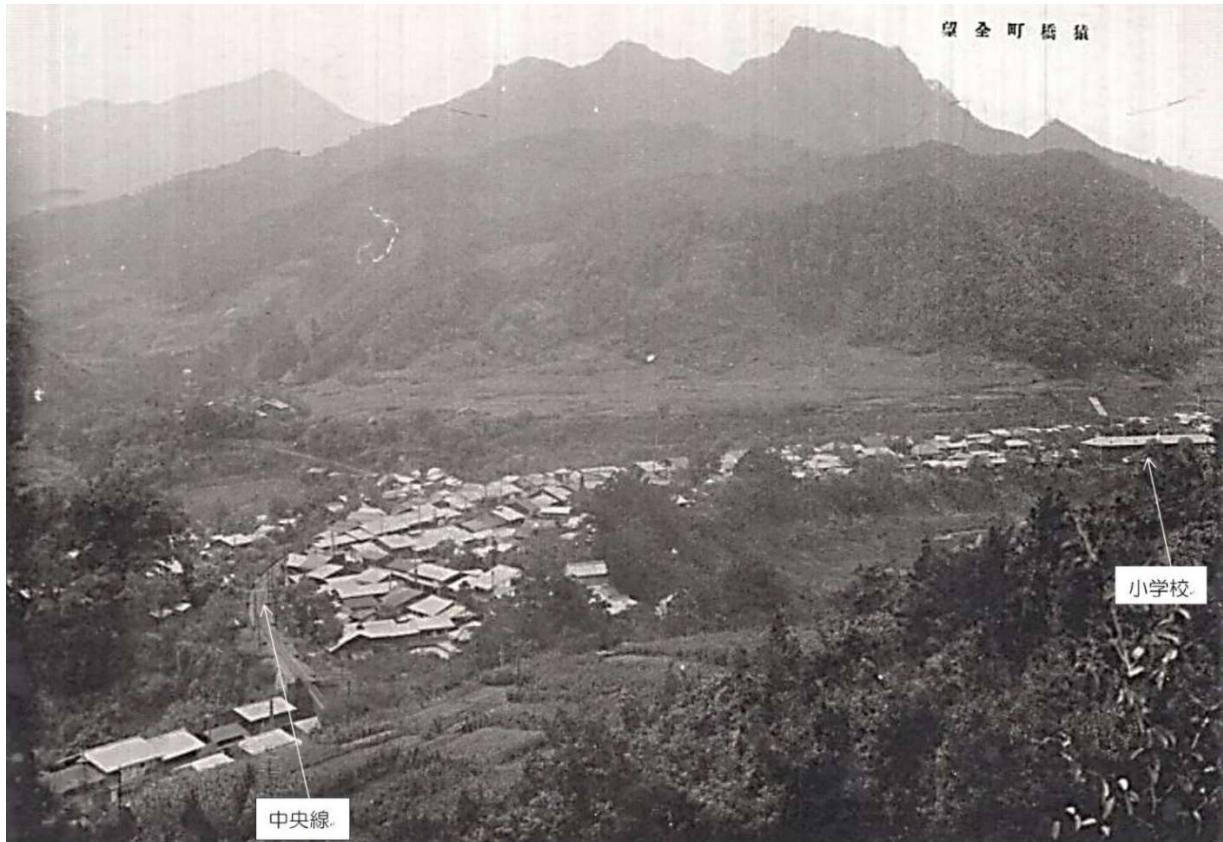
猿橋の町は南北に山があり、町全体を眺望する場所に事欠かない。町を眺望する絵葉書も多く発行されている。ここではそのうち2点を紹介する。

図2101 梨木原からの町並遠望（絵葉書） 大正時代の写真。



- 近景には大原村役場・大布屋・登記所・料亭東亭・七軒長屋・百瀬宅の白い蔵など、遠景に郡役所や官舎・警察署・梅の湯・松葉の神社の森などが見える。新猿橋はまだ架橋されていない。
- 下和田へ行く道は拡幅前なので両側に家がある。加藤酒飯頭店の所で奥に大きく曲がっている様子がわかる。後に袋小路状になった場所。

図2102 招魂社近辺からの町並遠望（絵葉書）



中央線が通っており、右端に猿橋小学校の小柳校舎が見えるので、明治35年以降の写真。狭い土地にびっしり家が建っているが梨木原には何も建物がない。

第2章 仲町通り

図2201 大正期の仲町近辺（1）

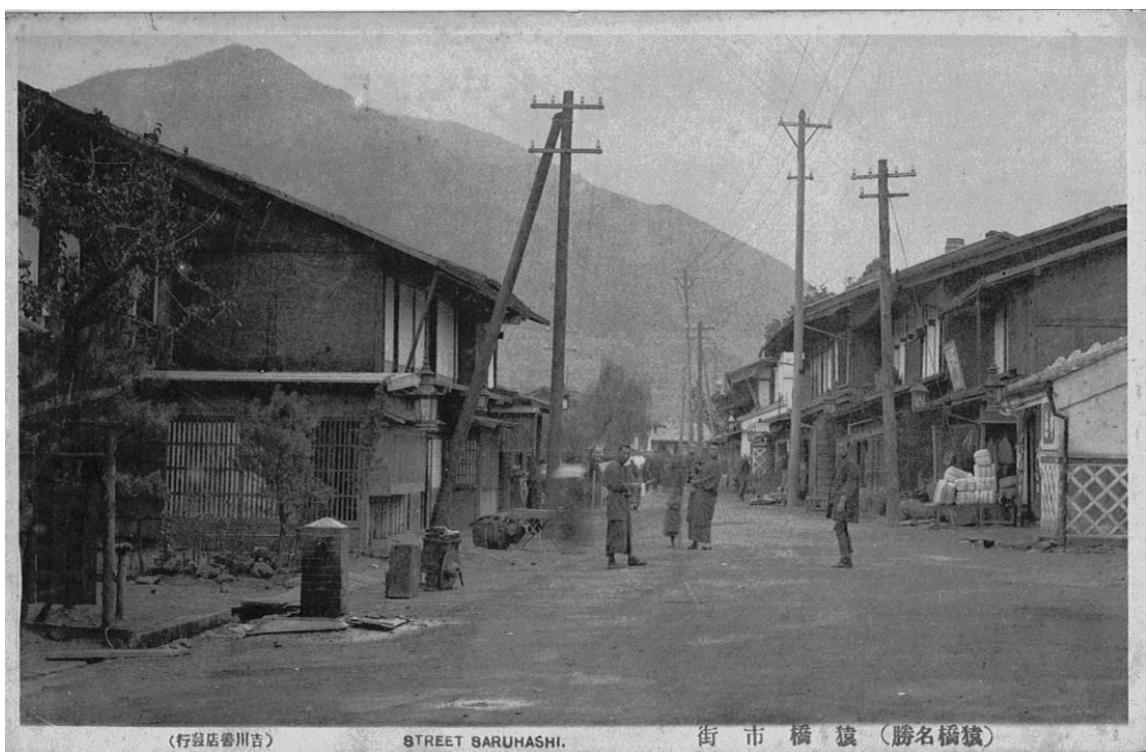


図2202 大正期の仲町付近（2）



柳の街路樹があった。通行人は皆和服。子供が多い。

図2203 ほぼ同じ地点（旧仁科薬局前あたり）から見た仲町通り（平成20年）



図2204 大正期の仲町通り（3）



（実際の絵はがきは左右逆転のまま発行されている）

図2205 昭和37年頃（1962）仲町（柏屋・三井屋前）から寿町を望む。



正面に3階建ての山崎パン店。遠景は三皇山

図2206 昭和37年頃 仲町近辺（2）



右側、オート三輪が駐車しているのは仁科自転車店、人物は仁科喬夫氏。対面は須賀屋。

第3章 街角点描

図2301 永田屋前の信号 昭和50年（1975）頃



左は守屋時計店（以前は伊勢屋薬店）

図2302 三登屋前（昭和50年代）

かつての三登屋。現在は新国道の用地になってしまった。左隣は稻毛屋

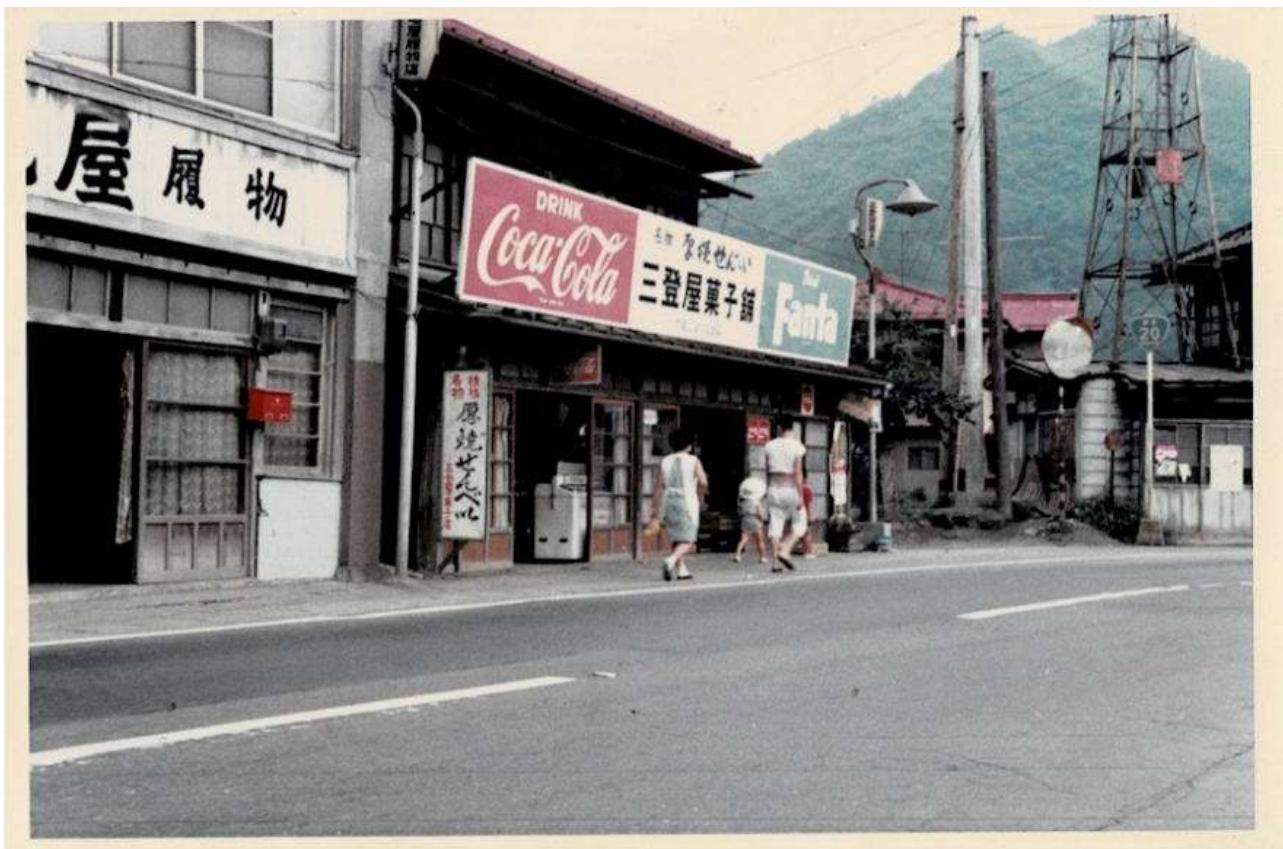


図2303 猿橋北詰 橋畔に床屋・菓子屋などがあった。



右側一段上の細い道が新猿橋架橋前の下和田方面への道（白線）。拡幅切り下げで家の前の細い道だけ残った。町の水道が断水になると頼りにした井戸があった。

図2304 横町風景（1）かつての老舗がシャッター街に



図2305 横町風景（2）



図2306 雪の中の豆腐売り 横町通り

大黒屋旅館向かいに大きな自動車が見える。大黒屋自動車部か。正面は藤田理容店・栄楽屋。

昭和32年（1957）



図2308 猿橋近くの鉄橋脇にて



後方はかつての中央線：大原トンネル入口

図2307 失敗作か芸術作品か
郵便局前から西側、三皇山を望む。

図2309 往時の下和田道

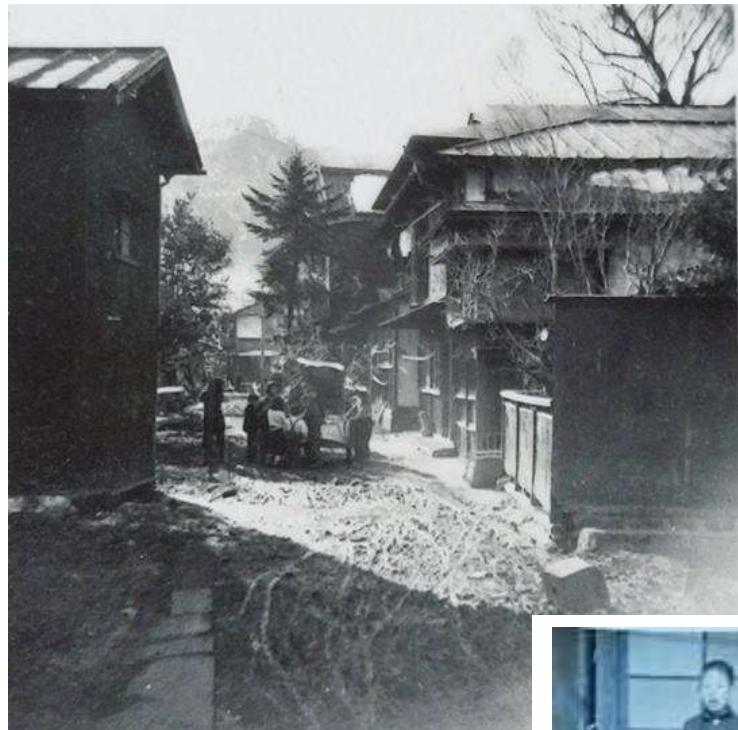


下和田道はこんなに狭かった。

図2310 猿橋大火類焼を免れた水明楼と中宿 (昭和30年代)



図2311 中宿：A B



C

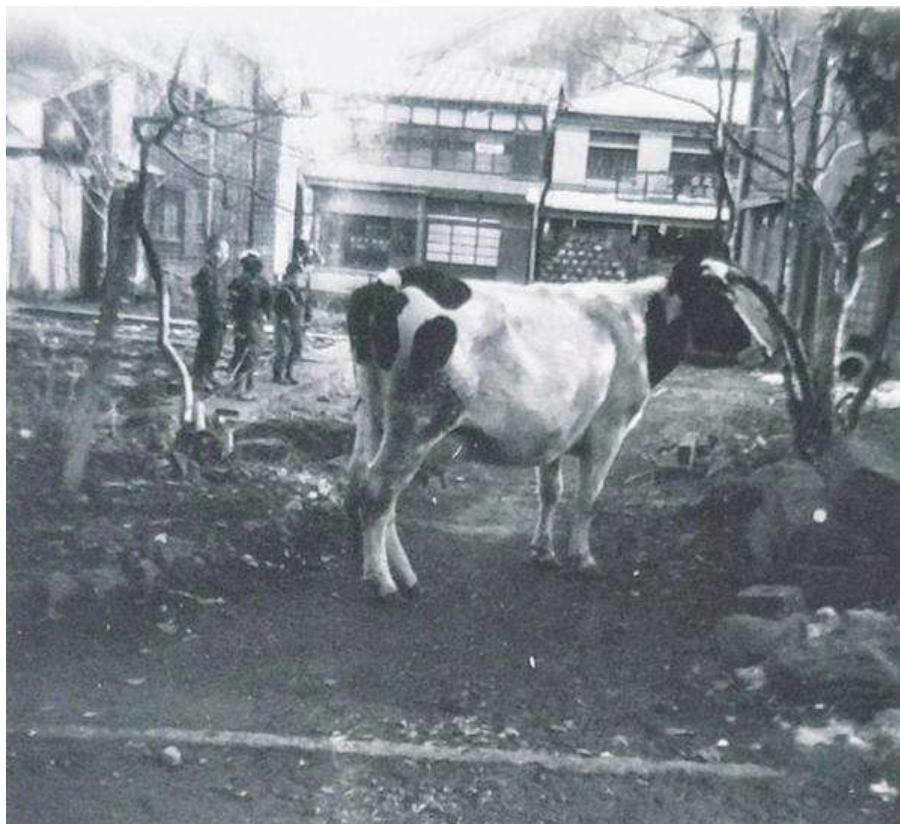


A : 現在は見られなくなった「洗い張」。ここは子供達の恰好な遊び場だった。奥は志村鉄工所、遠くに岩井屋と栄楽屋の一部。

B : 右の塀の中に小体な庭園があり、見事な紅梅があった。
左は岩井屋の倉庫。

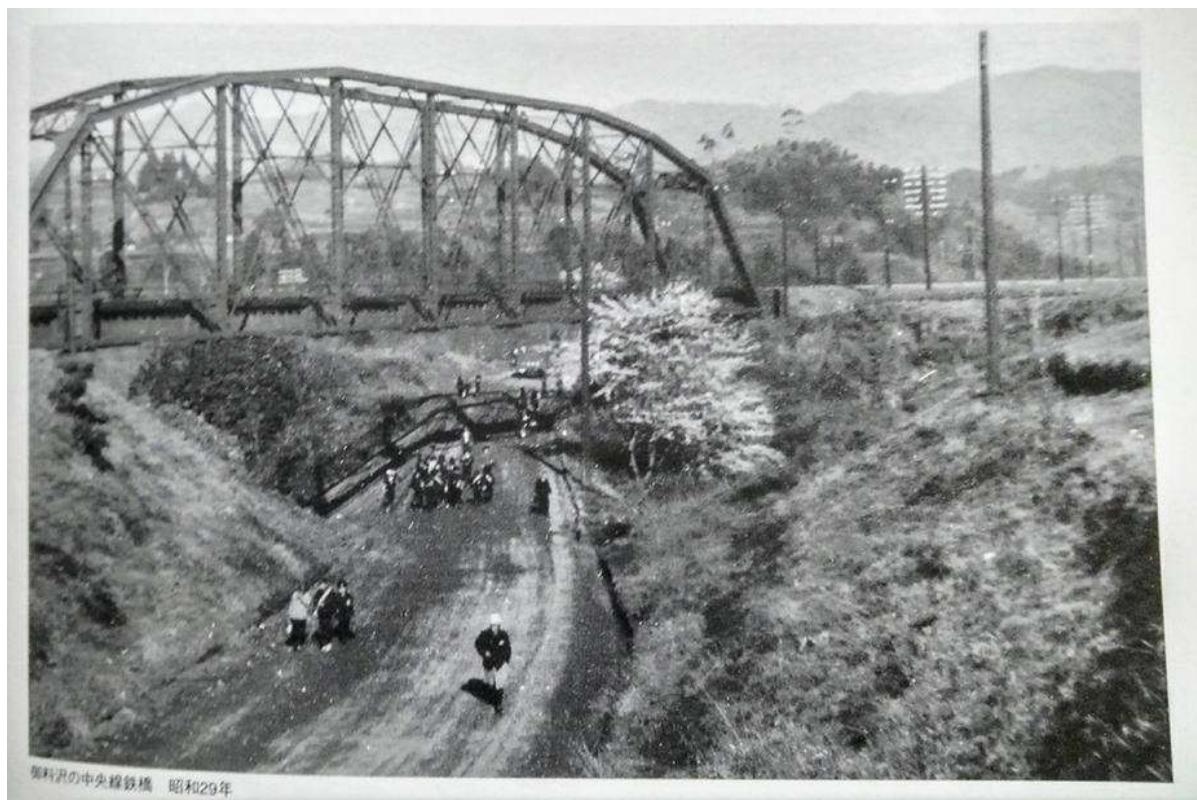
C : 中宿の家の前のコンクリート舗装でのローラースケート。

図2312 水明楼前に乳牛出現



正面は日之出屋と高橋商店、右は郵便局の建物、左は志村鉄工所。

図2315 鳥沢入口の坂道



上は中央線鉄橋、まだ舗装なし。通行するのは富浜中学生か。

第4章 橋畔・橋上風景

図2401 大正期のさるはし橋上

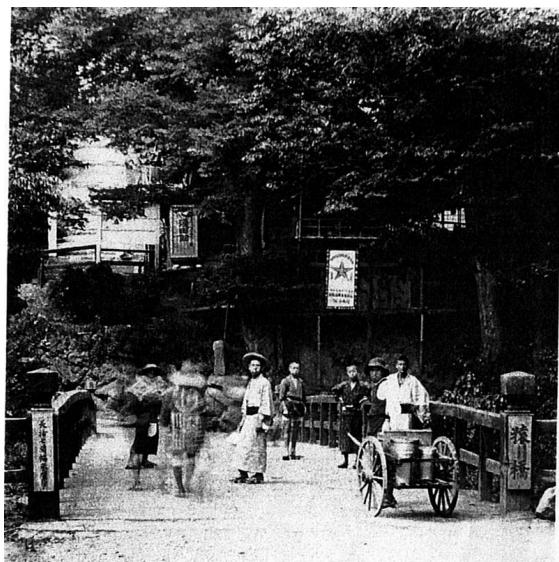


図2402 荷を背負った馬が通る



図2403 荷車が通る



図2404 自動車も通った。
(絵葉書)

図2405 橋畔 松本屋



図2406 山王宮遷座式

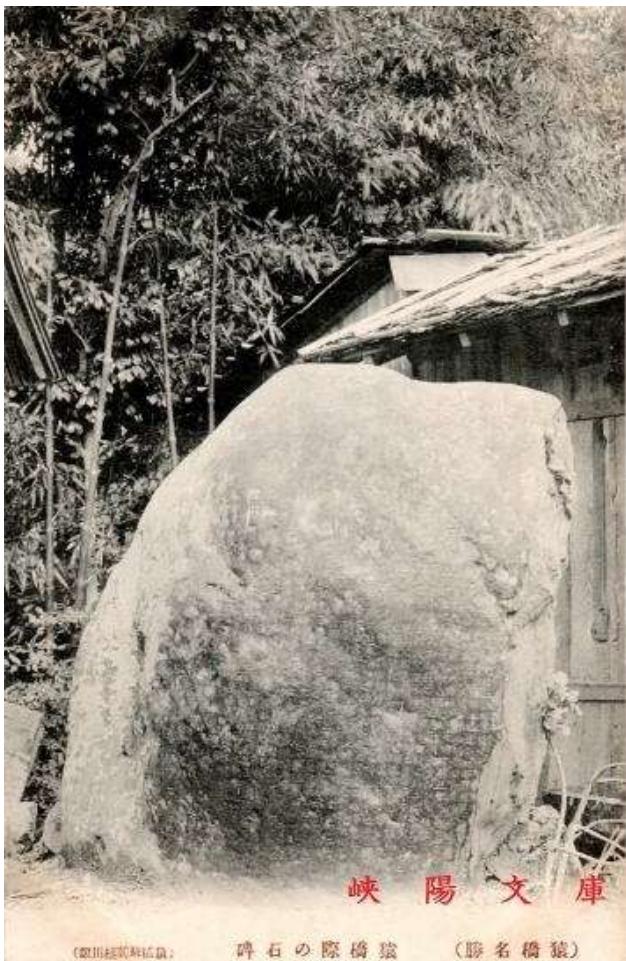


図2407 山王宮 絵葉書には「妙見堂」とある。

昭和11年 (1936)



図2408 猿橋記



我大日本構梁之奇巧者周防之算橋岐咀之懸橋是己峽也者山岳之所列時險櫛比達々斗絕不可凌矣比諸蜀門陳倉之險不易上焉在昔方水綠天正之間武田氏真淪城峽其耽々闢以東諸供轎者有以夫傳曰洪荒之間有猿橋王蹕而抱葛藟攀緣過斷崖古之智者視而倣是偃木於巨崖重以架潤結構之智工天下之代至今鎮臺人蹟始通矣也爾來工人範之製亦因加焉猿之神木於巨崖重以架潤結構之智工天下之代至今鎮臺士女雜鬼羣及行商之道有亡者亡不皆臻焉峽之土埴厥田中厥賦上宣稅梁萬峽山出金厥婦女善鑿織厥幕契橋袖柿浦云海運凡百物貨駄而出之厥利巨々見猿王縫藤蔓而涉於是乎般造橋也未知孰是蓋觀轉蓬而製車見浮葉而爲舟古之智者皆爾余嘗聞之峽人猿橋之堅而絕桂川不盡篠子笏川諸水會同于此深而迅不可測矣橋凡廣丈餘袤二十餘步不柱如援道厥製甚妙橋下四十有八傳諸不朽也則立碑於猿橋心月寺境蓋顯父母之國也余辭不敢不許遂受厥狀而後有水雲霧杳冥故俯臨者眩不克正視也是則峽之奇觀焉已石夷康字由之世峽人而好文辭乃以狀謁余曰峽吾父母之國也每夢寐厥山川意斯猿橋而母志孰知厥所謂且夫古之人利物成巧恬乎亡聞邪竒事夫可沒邪請得子之文以誌也則立碑於猿橋心月寺境蓋顯父母之國也余辭不敢不許遂受厥狀不藉人爲蓋此斷崖途肆難濟神矣猿王蹕緣葛藟智人範之萬類承機也何奇斯之隘陼萬水所歸匱磕注澗神魂俱飛一曉既成萬類承機是始千載與利實五年乙亥之冬十月十五日東都錦江鳴鳳卿撰

図2409 A | で描いた大正期の猿橋橋畔風景

正面右：猿橋警察署 中：第十銀行猿橋支店 左：大黒屋旅館



図2410 橋上で徴兵検査の記念写真 大正12年(1923)



図2411 橋上で記念写真 昭和10年(1935)

